

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「話者の移行期」に現れるあいづち：
日本語,台湾の「国語」と台湾語を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): backchannels, Japanese, Mandarin, Taiwanese, speaker change 作成者: 陳, 姿菁, CHEN, Tzuching メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002144

「話者の移行期」に現れるあいづち —— 日本語、台湾の「国語」と台湾語を中心に ——

陳 姿 菁

キーワード

あいづち、日本語、中国語、台湾語、話者交替

要 旨

本研究では、日台の電話会話資料を用い、現在の話者から次の話者に移行するとき（「話者の移行期」）に生じる、話し手と聞き手のあいづちの交差パターンを明らかにした。分析手法としては、陳（2001, 2003）で分類した「 α 」（「はい」、 「嗯」系、「 he^n 」系、「 $hə^n$ 」系と「 hm 」系）と「 β 」（「そう」系、「對」系、「 $hioh$ 」系と「 ho 」系などを指す）の基準を用い、それぞれが日台の「話者の移行期」においてどのように出現しているのかを検討した。結果として、日台ともあいづちを次の話者を決めるストラテジーとして頻繁に使用し、そのうち、日台ともあいづちが異なる話者によって2回継続して生起するパターンが最も多く見られた。日本語の上位2位は「 $\beta \alpha$ 」、「 $\alpha \alpha$ 」で、台湾の「国語」と台湾語は「 $\beta \beta$ 」、「 $\beta \alpha$ 」であることが示された。その2回のあいづちを中心に分析したところ、最初に現れたあいづちは先行する発話に対するあいづちであり、後続のものはターンをパスする働きを持つものであることが分かった。ターンをパスするあいづちとして、日本語は「 α 」が、台湾の「国語」と台湾語は「 β 」が多用されていることも分かった。

1. はじめに

実際の日本語及び台湾人の母語の会話を見てみると、「はい」、「ええ」、「うん」、「ああ そうですか↓」、「なるほど」、「本当」、「嗯」、「啊」「對啊」、などのあいづちの各形式は話し手が話している間に現れるだけでなく、話者交替の時にも頻繁に現れていることが分かる。つまり、実際の会話においては、現在の話者から次の話者に移行する場合、すぐに移っていく場合もあるが、数回のあいづちのやりとりをしてから交替していくこともあるのである。あいづちは話し手の話をサポートするだけの役割にとどまっているのだろうか、それともほかの役割も果たしているのだろうか。本研究は日台の対照研究を通じて、現在の話者から次の話者が決まるまでの交渉段階で現れるあいづちの使用実態を考察し、日台の相違を明らかにする。

2. 先行研究

日本語におけるあいづちは会話の重要な特徴として、頻度、機能について数多く研究されてきたが、その定義についてはまだ定説になっていないのが現状である。堀口(1988)は、「はい」、「ええ」、「なるほど」などは異なる品詞に属しているが、「繰り返し」や「言いかえ」などの表現と区別するため、これらをまとめて「相づち詞」と名づけ、これが従来のあいづち研究の中心的

な対象となってきた。多くの研究は、堀口(1997:p.42)が「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」をあいづちとしている立場に従っているが、話し手の発話の終了直後に聞き手が送った反応をあいづちとして扱う研究もある(メイナード 1993)。実際の会話データを観察してみると「あいづち」の形式とされているものは、話し手が発話権を行使している間、あるいは話し手の発話の終了直後に現れるのみならず、話者の交替が起きて次の話者が決まるまでの交渉段階や新たなターンの始まりの段階においても使用されていることが分かる。

「あいづち」の形式とされているものは、話の途中だけではなく、異なる発話環境(話者の交替、次の話者が決まるまでの交渉段階など)で広く使用されていることから、同じ形式を持つものが異なる発話環境においてどのような役割を果たすのかを検討する必要があると思われる。

本研究は会話の中に現れる「あいづち」の形式とされているものを総括的にとらえる研究の一環として、ここでは、話者の交替が起きてから次の話者が決まるまでの交渉段階で現れるものを中心に分析を行う。また、紙幅の都合で、新しい話者に交替した後に、その新たなターンの開始部に現れるあいづちは割愛した。これについては陳(2005)を参照していただきたい。

話者交替が起き、次の話者が決まるまでの交渉段階に現れるあいづちに関する先行研究として大浜(2000)、Iwasaki(1997)などが挙げられる。大浜はターンの交替の側面から「ターンを自己選択するとき」「ターンを自己選択しないとき」「その両方の時」「ターンを譲渡されるとき」の4つの場面で使用できるあいづちを特定し、日本人母語話者と日本語学習者(中級以上)の使用について分析した。その結果、あいづちの数や種類別の出現頻度において、日本語母語話者と日本語学習者には同じ傾向が見られ、一方、ターン交替の使用タイプ及び各ターン交替形式においては、あいづちの使い分けに相異が見られたという。たとえば、日本語母語話者はターンの配分へのイニシアティブを避ける傾向があり、それに対して日本語学習者は日本語母語話者に比べ、ターンの配分に積極的にかかわる傾向にあるということである。大浜は今まであいづち研究にほとんどされてこなかった話者交替の観点からあいづちをとらえようとしているところが評価できる。しかし、個々のあいづちの出現や形式にとどまり、ターンの交替の際の複数のあいづちのやりとり、つまりあいづち間の関係について見ていない。

Iwasakiは日本語母語話者2人ずつ4組の対面会話を20分ずつ収録して得た、計80分の資料を分析した。提示話題は1994年ロサンゼルスで起きたノースリッジ地震(Northridge Earthquake)の体験についてである。あいづち表現“backchannel expressions”に関しては、形式から非語彙的型“non-lexical backchannels”, フレーズ型“phrasal backchannels”, 実質名詞型“substantive backchannels”¹⁾の3つに分けられた。Iwasakiは話者交替時に現れたあいづち表現を“loop sequence”と名づけ、最初に現れたあいづち表現を“loop-head”, その次に現れたあいづち表現を“loop-tail”としている²⁾。

その上で、Iwasakiは“loop sequence”をフロア³⁾移行型“floor transition”, フロア交替の前兆型“prelude to floor transition”, フロア再構築型“floor reconstruction”とオープンフロア型“the loop sequence in the open floor”の4つのタイプに分け、“loop sequence”の役割をフロア

交替の視点から論じた。結果として、“loop tail”は次のフロア所有者“floor holder”を決めるための交渉パターンの1つであると述べている。すなわち，“loop sequence”はフロアの所有者がフロアの移行を暗示したり，フロアのサポーターが突然に振られてきたフロアを元のフロア所有者に返したり，あるいは会話参加者が情報を共有したり，分かち合ったりするようなオープンフロア“open floor”の時に現れていると論じている。

さらに，Iwasaki は収録した会話と同時に収集した英語とタイ語における“loop sequence”の出現回数を比較している。その結果，4組の英語会話の中では10例，4組のタイ語会話ではわずか2例の“loop sequence”が観察されただけであった。それに対して，4組の日本語会話では78例も抽出されたと報告している。Iwasaki は日本語において“loop sequence”が頻繁に現れた理由として，日本人の相互依存“mutual dependency”という会話パターンの特徴を挙げている。

本研究はこの“loop sequence”という観点から考察を述べることにした。つまり，Iwasaki の“loop sequence”を「話者の移行期」と呼び，そこで現れる「あいづち」の形式とされているものを整理し，その使用実態及び日本語，台湾の「国語」と台湾語⁴の相違を比較する。本研究が扱っている範囲を図で示せば，次の通りである。

1A : ターン
2B : あいづち
3A : あいづち
4B : ターン

堀口(1997)やメイナード(1993)などの先行研究が扱っている部分は2Bまでであり，3Aのように2Bの後に続く状況は含まれていないが，大浜(2000)などのように3Aまでを広くあいづちと呼んでいる先行研究もある。本研究ではあいづちを，「聞いているサイン」という基本義を持っているもの⁵としてとらえる。このため，扱うあいづちの範囲は大浜(2000)と同様広いものとなるが，形式的には堀口(1988)における「相づち詞」の定義を踏襲するものとする。本研究は2Bと3Aのようなターンの移行期の間（「話者の移行期」）に現れるものに焦点をあて，分析を行う（ターンの概念については4節で詳しく述べる）。

2Bは，メイナード(1993)の定義，そして言語資料の考察をふまえ，以下のような条件を満たすものとする。

- ① 話し手の発話の間，あるいは直後に聞き手によって送られた短いメッセージである。
- ② ターンを取る働きはない。
- ③ 質問（終助詞（台湾の「国語」と台湾語では語気助詞）などによる質問や情報確認を含む）や疑問あるいは呼び掛け，もしくは命令に対する答えではない。

3Aは②と③及び下記の④の条件を満たすものとする。

- ④ 話し手の発話の終了直後に発せられた聞き手のあいづちの後に続くもの。

上記の手順から得たものは2Bと3Aとも「はい」「ええ」「うん」「あそうですか」，「是」「對」

「這樣」「hèⁿ」「hò˙」「hèⁿ ah」「hioh」などの同じ形式を持つものである。本研究は「聞いているサイン」というのがあいづちの基本義であり、この基本義以外に複数の役割が同時に重なっており、発話箇所によってその複数の役割が消長しているのではないかと考えている。すなわち、2Bと3Aは一定の形式及び共通した基本義を持つあいづちであるが、異なる発話箇所（条件①と④）によって会話での役割が変わると考え、本研究は2Bと3Aに現れるあいづちの使用実態、役割の変化及び日台の相違について考察することを目的とする。

3. 分析方法及びデータ

3.1. 分析方法

まず、日本語及び台湾の「国語」と台湾語のあいづちをパターン化し、パターン化したあいづちの出現傾向を分析する。パターン化の基準は陳(2001, 2003)に従う。

陳(2001)は日本語のあいづちを発話位置と形式により〈「はい」系〉〈「そう」系〉〈感情表現系〉〈複合系〉〈先取り系〉⁶という5つのパターンに分類し、それぞれのパターンの機能及び発話位置の相互関係を分析した。その結果、グループ分けの仕方などが異なるものの、聞き手の理解の度合いにより、あいづちが使い分けられているという点において今石(1993)と同じ傾向が見られた。そこで陳は、聞き手が話し手の話を理解するために必要となる情報のまとまりを“I”とし、実際のやり取りは数回にわたって伝えられ、すなわち“I”は $I_1 I_2 I_3 \dots I_n$ のように区切られるとしている（nは聞き手にとって話し手の話をまとめた情報として理解可能なところである）。

さらに、聞き手が話し手の話を理解するのに十分な必要情報のうちの断片を入手した時に発したあいづちを「 α 」（「はい」系）とし、聞き手がひとまとまりの情報を受け取り、話し手の話の全体を理解したため打ったあいづちを「 β 」（「そう」系・その他系1・その他系2・その他系3）とするならば、談話におけるあいづちの公式は「 $I_1 - \alpha - I_2 - \alpha - I_3 \dots I_n - \beta$ 」としてまとめることができると論じている。陳(2003)は陳(2001)の公式をふまえた上で、台湾の「国語」及び台湾語に同じ傾向が見られたと指摘している。本研究は「 α 」と「 β 」という基準であいづちを分類し、「話者の移行期」で現れたあいづちを観察することによって、日台のあいづちの使用範疇の相違を考察する。このような手順をふむことであいづちの新たな役割が解明できると考える。

表1 日本語のあいづち

		形式
α	「はい」系	「はい」「うん」「ええ」、そしてそれらが反復しているものもこの系列に入れる。
β	「そう」系	「そう」という指示詞が入っていることばは《「そう」系》とする。代表的なものは「そうですか↓」などである。
	感情表現系	《「はい」系》と《「そう」系》以外によく見られる驚き、反問などの感情を表す表現はこの系列に入る。例えば「へー」、「ほお」、「ふーん」などが挙げられる。
	複合系	《「はい」系》, 《「そう」系》, 《感情表現系》など2つ以上の系列が複合した表現である。「ああ　そうですか↓」が代表である。
	先取り系	話し手の話を先取りする表現はこの系列に入る。

↑：上昇調 ↓：下降調

表2 台湾の「国語」と台湾語のあいづちの系列⁷

	「国語」	台灣語	「中間的な表現」 ⁸
<i>a</i>	「嗯」	[he ⁿ]	[hə ⁿ] [m] [hm] [hn] [ɤ ⁿ hɤ ⁿ] [m hm]
<i>β</i>	「這樣」「對」「好」「哦」 「真的」「啊」「是」「是 哦」	[án-ne] [tiòh] [hó] [oː] [hiòh] [he ⁿ ah] [hā ⁿ áh] [hoː] [hoː ⁿ] [hiau lah] [wa ⁿ] など ⁽¹⁾ [oː hoː hoː] など ⁽²⁾	「OK」[m] など ⁽³⁾ [hè ⁿ hè ⁿ hè ⁿ 好啊] など ⁽⁴⁾

- (1) 「waⁿ」のほか、「aⁿ」, 「haⁿ」の表現も観察された。陳(2003)では「驚き・反問」の系列として分類している。文字通り、驚きや反問を表す表現である。その中の「hãⁿ」という反問の表現は驚き表現としても使えるため、陳は「驚き・反問」というふうになづけた。
- (2) 陳(2003)で名づけた「複合」系である。「複合」系とは「驚き・反問」系以外の台湾語のβの表現が複合した表現であり、代表的なものは〈「o」 + 「ho」〉(5つのバリエーションがある)〈「o」 + 「hó」〉(4つのバリエーションがある)〈「o」 + 「án-ne」〉(4つのバリエーションがある)〈「ho」 + 「án-ne」〉(5つのバリエーションがある)などが挙げられる。
- (3) 「m̃」は「a」の「m」系の声調と異なり、反問を表す表現である。そのため、陳(2003)では「中間的な表現」の「反問」系として名づけた。
- (4) 陳(2003)でいう「国台中複合」系であり、台湾語と「中間的な表現」・台湾語もしくは「中間的な表現」と台湾の「国語」との複合表現であり、「hàⁿ hàⁿ hàⁿ hioh», 「ō hō hō hō, hāⁿ hāⁿ hāⁿ», 「哦真的哦 hāⁿ hāⁿ」などの表現例が観察された。

3.2. 分析データ

本研究では電話の会話を分析対象とし、それぞれ日本と台湾在住の母語話者のインフォーマントに依頼し、電話会話を録音してもらった。本国在住のインフォーマントに依頼した理由は、母語以外の言語の影響を最低限に抑制する意図からである。できる限り自然な会話データを収集するため、インフォーマントには母語の会話を研究するための資料であるとだけ告げ、詳しい研究内容と目的は伝えていない。また、方言差があることを考慮し、出身地の違うインフォーマントに依頼したが、日台とも用法の顕著な違いは見られないため、ここでは特に方言差には触れな

い。収集した資料のうち文字化し、本研究のデータとしたものを以下に示す。

表 3 日本の言語資料

インフォーマント	時期	性別	年齢	出身	件数	資料時間	電話の相手(性・人数)	
A (無職)	1998	F	60代	長野	31	約84分	F 28 M 7	*
B (教職)	1999	F	40代	鳥取	10	約24分	F 6 M 4	
C (教職)	1999	F	40代	東京	6	約29分	F 6 M 0	
D (教職)	2000	F	30代	奈良	3	約4分	F 1 M 2	

*：一件の電話会話の中で話し相手が変わる場合を含む

表 4 台湾の言語資料

インフォーマント	時期	性別	年齢	出身	件数	資料時間	電話の相手(性・人数)	
E (公)	1998	F	40代	高雄	9	約19分	F 6 M 5	*
F (OL)	2001	F	20代	宜蘭	20	約107分	F 16 M 6	*
G (サ)	2001	M	30代	台中	6	約41分	F 3 M 3	

*：一件の電話会話の中で話し相手が変わる場合を含む 公：公務員 サ：サラリーマン

4. 「話者の移行期」に現れるあいづちのパターン

Iwasaki(1997)は「話者の移行期」に現れたあいづちの役割をフロアの観点から分析している。しかし、本研究は、フロアの観点ではなく、同じ話題内での実質的発話による話者交替で会話を区切る立場の観点からあいづちを分析するため、Iwasakiで提示された枠組みをそのまま用いることは困難である。そこで、本研究では分析の枠組みを、以下のように定めることとした。

まず、「話者の移行期」が始まる場合というのは様々な状況が考えられるが、本研究では、話し手が伝えたい情報が一段落した場合（平叙文）と、話し手が聞き手に質問をしてターンを渡す場合（疑問文）を中心に分析を行う。つまり、「話者の移行期」に入る前の話し手の話が〈平叙文〉である場合と〈疑問文〉である場合の2つに分ける。質問によってターンが譲られたにも関わらず、短い答えの後にまた再び話者移行が起きる場合と平叙文の後に「話者の移行期」に移る場合とは、その後のあいづちの出現形式に影響を及ぼしているのではないかと考え⁹、本研究ではその2つに分け、検討していく。疑問詞を伴わなくても、上昇調や終助詞で問いかける場合はすべて〈疑問文〉として分類する。以下の図式は2回のあいづちが現れる場合のものである。

あいづち

ターン

〈疑問文のパターン〉

ターン

あいづち

ここでターン(turn)という概念について述べておきたい。金(2000, 2001)はターンを「主流」, 「非主流」, 「中立」の3つに分けている。「主流ターン」とは実質的な発話でフロアを取り得る内容のターンである。「非主流ターン」には「あいづち」, 「予期失敗」, 「同時開始」の3つがあり, 「あいづち」がそのうちの大半を占めている。「予期失敗」とは現話者以外の参加者がターンを取ろうと試みるものの, 現話者が話し続けるため, ターンを取るのに失敗した発話である。「中立ターン」は, 会話の流れとは無関係の独り言を含む私語や, 混乱などによる聴取不能の発話を指している。

本研究でいうターンとは実質的な発話であり、金が「主流ターン」として扱っているものを指す。質問に対する答えも実質的な内容を持つものとして、ターン（つまり「主流ターン」）として扱う。そして「話者の移行期」に現れたあいづちについては金が言うところの「非主流ターン」として扱うこととする。なお、本研究はあいづちに焦点を当てているため、「予期失敗」や「同時開始」などについては議論しない。

「話者の移行期」においてあいづちが現れた回数は 2 回, 3 回, 4 回以上とあるが, 本研究では収集したデータの中でも最も多く現れた 2 回のパターンを中心に検討していく。ここでは Iwasaki (1997) で述べられた “loop-head” “loop-tail” の考えを用い, この 2 回のパターンを隣接ペア (adjacency pair) を構成するものと見なし, 最初に現れたあいづちを第一構成要素, 第一構成要素に同調して後続するあいづちは第二構成要素とする。

そして、あいづちを陳 (2001, 2003) の分類に従い「 α 」(「はい」系・「嗯」系, 「heⁿ」系など) と「 β 」(「そう」系・「對」系, 「hi^oh」系など) に分ける。分析の便宜上, 平叙文や、質問に対する答えは「D」で、疑問文は「Q」という符号で表す。以下、例を示す。

(用例の表記記号: C: 掛け手 R: 受け手 -: 音を伸ばしているとき //: 2人が同時に発話し始める点 (1): () 中の数字はポーズの長さ (笑): 笑い XX: 聞き取れない箇所 ↓: 下降調 ↑: 上昇調)

〈例〉

1R：だいたい帰ってくる // よ XX だね

D

2C: // あっ そうですか↓

 β

3R：ええ

a

4C：あのう4時すぎになると思い// ますけど

D

上の例は、60代の女性Rが60代の男性Cの家を訪ねるのに良い時間帯を聞くという内容である。1Rのところで話は一段落し、2Cはそれを理解できたので、「β」のあいづちを打った。しかし、3Rは話し手になることを放棄して「ええ」で話を流し、ターンをパスした。そこで、4Cはターンを取り、話を展開したので、1Rと4Cは平叙文と見なし、「D」で示している。2Cの「あっそうですか↓」は「β」に属し、3Rの「ええ」は「a」に属するため、それぞれ「β」、「a」で記す。本研究では「次の話者が決まるまでの部分」、つまり上記の例の1Rから3Rまでの部分（符号で表せば「D β a」となる）を中心に検討することにする。「次の話者が決まるまでの部分」（ここでは4C）との関係に関しては、別の論文に委ねたい。

日台の「話者の移行期」において、話者が交替するまでのあいづちの回数をまとめると次のようになる。

表5 日台の「話者の移行期」で現れたあいづちの回数

	2回のあいづちで 話者交替	3回のあいづちで 話者交替	4回以上のあいづちで 話者交替	計
日本語	73 (83.9%)	8 (9.2%)	6 (6.9%)	87 (100%)
台湾の「国語」、台湾語	83 (69.7%)	27 (22.7%)	9 (7.6%)	119 (100%)

この結果を見ると、日台とも、「話者の移行期」で現れたあいづちの回数は2回が一番多いことが分かる。

以上をふまえた上で、会話資料から抽出したあいづちの順序のパターンをまとめたものが次の表6、7である。

あいづちの順序のパターン数は日本語では14であるのに対し、台湾の「国語」と台湾語では20であった。パターンの類型に関しては、表6と表7の網掛け部分に示したように、日本語では「D β a」が一番多く現れたパターンであり、以下「D a a」と「QD β a」の順になっている。一方、台湾の「国語」と台湾語において一番多く見られたのは「D β β」で、以下「D β a」、「D β β β」という順になっている。

「話者の移行期」の前が平叙文の場合と疑問文の場合とを比べてみると、日本語では、「話者の移行期」の前が平叙文の場合は「D β a」（48.3%）と「D a a」（14.9%）が多く現れ、「話者の移行期」の前が疑問文の場合は「QD β a」（11.5%）というパターンが最も多く見られた。このことから日本語では、「話者の移行期」の前が平叙文の場合も疑問文の場合も、話者移行期に現れやすいあいづちは「β a」というパターンであることが分かる。

次に台湾の「国語」と台湾語の場合を見てみよう。「話者の移行期」の前が平叙文の場合は「D β β」（36.1%）、「D β a」（12.6%）が現れやすいパターンとなっており、また、「話者の移

行期」の前が疑問文の場合は「QD $\beta\beta$ 」(5.0%), 「QD βa 」(4.2%) という順になっている。「話者の移行期」の前が平叙文の場合と疑問文の場合を併せて考えると、「 $\beta\beta$ 」と「 βa 」の2つが多く見られるパターンと言える。つまり、話者移行期の先行発話は平叙文の場合であれ、疑問文の場合であれ、あいづちのパターンは同様な使用傾向にあることが分かった。

表6 日本語における「話者の移行期」に現れるあいづちパターン

2回	D $\alpha\alpha$	QD $\alpha\alpha$	D $\alpha\beta$	D $\beta\alpha$	QD $\beta\alpha$	D $\beta\beta$
数	13	2	3	42	10	2
%	14.9%	2.3%	3.4%	48.3%	11.5%	2.3%
3回	D $\beta\alpha\alpha$	D $\beta\alpha\beta$	QD $\beta\alpha\beta$			
数	2	5	1			
%	2.3%	5.7%	1.1%			
4回	D $\beta\alpha\beta\alpha$	QD $\beta\alpha\beta\alpha$	D $\alpha\alpha\beta\alpha$	D $\beta\alpha\alpha\alpha$	QD $\alpha\alpha\beta\alpha\beta$	
数	2	1	1	1	1	
%	2.3%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%	

：頻度が高いもの D：平叙文（質問に対する答えを含む） Q：疑問文 %：割合

表7 台湾の「国語」・台湾語における「話者の移行期」に現れるあいづちのパターン

2回	D $\alpha\alpha$	D $\alpha\beta$	QD $\alpha\beta$	D $\beta\alpha$	QD $\beta\alpha$	D $\beta\beta$	QD $\beta\beta$
数	4	6	3	15	5	43	6
%	3.4%	5.0%	2.5%	12.6%	4.2%	36.1%	5.0%
3回	D $\alpha\alpha\beta$	D $\alpha\beta\beta$	D $\beta\alpha\beta$	D $\beta\beta\alpha$	QD $\beta\beta\alpha$	D $\beta\beta\beta$	QD $\beta\beta\beta$
数	2	5	4	1	1	11	4
%	1.7%	4.2%	3.4%	0.8%	0.8%	9.2%	3.4%
4回*	D $\beta\beta\beta\alpha$	D $\alpha\beta\alpha\beta$	D β (笑) $\beta\beta\beta$	D $\beta\alpha\beta\alpha\beta$	D $\beta\alpha\beta/\alpha\beta\alpha$	QD $\beta\beta\beta/\beta\beta$	
数	1	4	1	1	1	1	
%	0.8%	3.4%	0.8%	0.8%	0.8%	0.8%	

：頻度が高いもの D：平叙文（質問に対する答えを含む） Q：疑問文

4回*：4回以上 β/a ： β と a が同時に発されていること %：割合

さらに日台で頻繁に現れたパターンをまとめると、表8になる。

表8 日台資料で頻繁に見られた「話者の移行期」の2回のパターン（上位2位）

	平叙文		疑問文	
日	βa 48.3%	$a a$ 14.9%	βa 11.5%	$a a$ 2.3%
台	$\beta\beta$ 36.1%	βa 12.6%	$\beta\beta$ 5.0%	βa 4.2%

先行発話が平叙文と疑問文の場合において話者移行期のあいづちのパターンはよく似た傾向を示しているが、その形式面においてはどうなっているのかについて、以下では代表的な例を見ながら検討していく。

5. 「話者の移行期」のあいづち

例1は、短いあいづちが2回交わされた日本語の会話の例である。網掛けは「話者の移行期」に現れたあいづち。また、右側の記号はあいづちのタイプを示す符号である。

〈例1〉

1C：見えるからね // え	D
2R： <u> // ええ、あっ そうですか↓</u>	β
3C： <u>ええ</u>	α
4R：あたし全然いったことない（笑）	D

〈例1〉は、1CがRの友達であるYのところで牡丹を見せてもらいたいとRに依頼した会話である。Cは、前回見せてもらったときに庭の外からも牡丹が見えたことを覚えていたため、RにYの庭からだけでも牡丹が見えるという情報を伝え、今回は外から見ただけでいいからといって依頼をしようとした。2Rではその情報を初めて知り、「ええ、あっそうですか↓」というあいづちを打ち、自分が理解したことを相手に伝えた。しかし、3Cは自分の意図をさらにはっきりとは説明せず、「ええ」という短いあいづちを打ち、ターンをRに渡した。この3Cは自分が伝えた情報は確かであることを確認しながら、同時に庭の外から見たいという自分の意向をRが察知して、それに応じてくれるよう期待して、ターンを渡したと考えられる。

〈例2〉

1C：それでいいと思いますけれど	D
2R： <u>ええ</u>	α
3C： <u>ええ</u>	α
4R：あもう（1.4）	D
5C：そうしてください	

〈例2〉は、Yの牡丹を見せてもらいたいというRの依頼をCが取りつぎ、Yから許可を得たことをRに伝える場面である。Rが牡丹を見せてもらいたいというちょうどその日に、Yにはゴルフの予定があり、家を空けることになった。Rは庭の外からだけでものぞくことが出来たらと思っていた。しかし、Yはどうしてもお茶ぐらいには招待したいと考えたため、CとRはYが帰宅する予定の4、5時頃に行くことに決めた。ここで、1Cはそのほうが、お茶を頂かなくても、お話もできるし、いいと思うという考えを述べた。それに対し、2Rは「ええ」とあいづちを打ち、Cの発話が届いたという信号を発した。Cはこの決定のままであってほしいと3Cでさらに短いあいづち「ええ」を発し、自分のターンを譲ると同時にRの反応を促そうとした（これ以上

言うことが無く、どうぞ発言をしてくださいというサイン)。そこで、4RはYのゴルフの予定を邪魔したかどうかが気になり、「あのう」と言って自分の心配事について切り出そうとしたが、5Cはもうこれ以上あれこれ言うのをやめましょうと「そうしてください」と言って4Rの発話を遮った。

次は台湾の「国語」と台湾語の例を見してみる。

〈例3〉

1C：哦-可是一年一千多塊也還好啊，// 也還好啦，

ほおしかし、年間千円余りはまあまあだなあ // まあまあだ、

2R： //xx

3C：// 我們老板大概可以接受 D

// うちの上司は多分大丈夫

4R：// 對 哦（笑）這樣子 β

// そう↓ ほお（笑）そうですか↓

5C：對啊 β

そうよ↓

6R：那真的是很，那個是單純的那個-意外險的部分 D

それは本当に、本当に単純に一傷害保険の部分

〈例3〉は、Cが自分の上司の保険についてRに尋ね、年間で千円程度の保険金額なら上司も大丈夫だろうということをRに伝える場面である。Cがその情報を伝えた時点で4Rは理解し、笑いながら「哦（笑）這樣子（ほお（笑）そうですか）」というβ系のあいづちを打った。それに対して、5Cはそれを再度確認し、さらにβ系のあいづちを打った¹⁰。

〈例4〉

1R：[hiəh bō gún khó-lèng chá-khí khah chá-khí ē]

なるほど、いや私達は多分早起きして早めにいく

2C：[hiəh]

なるほど

3R：[ah mī-a-chài (0.5) góachá-khí chài'h-koh ká tiān-oē tng-i hó lah, in-úi mī-a-chài khó-lèng ē tng-i W] D

で明日(0.5)私は朝また電話するわ、明日Wにいくかもしれないから

4C：[hiəh ɔ:] β

なるほど

5R：[hèⁿ ah] β

そうよ

6C：[ah hit-ē lābg, he he he] 女孩子[ná-ē hiah chin-chió tng-lái ah]? (0.9) Q

であの、彼女なんであまり帰って来ないの？

これは R (女・20代) が義理の姉 C (女・30代) に、明朝早起きして友達を連れてドラゴンボートレースを見学しに行ってから、実家である W に寄るかもしれないことを伝えた事例である。4 C はその内容を理解し、「hioh (なるほど)」というあいづちを打ったが、5R は 4C の反応に対してさらに「hè ah (そうよ)」を発し、ターンをパスした。そこで、6C はドラゴンボートレースとは別の新たな話題を展開していった¹¹。

〈例 5〉

1R：沒有啦，我們要去日本玩

いや，日本に遊びに行くの

2C：是哦

そお↑

3R：一起去一起日本玩

D

一緒に日本に遊びに行く

4C：[hioh]

β

なるほど

5R：[hèⁿ]

α

ええ

6C：那，那你現在 XX 嗎？

Q

じゃ，今は XX なの？

〈例 5〉は、30代の男女同士の雑談であり、R (男性) が C (女性) に妻と一緒に日本に遊びに行くことを伝える場面である。R は 3R のところでその情報を伝え終え、4C は「了解した」という意味の「 β 」のあいづちを使ったが、それに対し 5R は「 α 」のあいづちを使ってターンをパスした。話はここで一段落し、6C は質問で新たな話題を持ち込んだ。

「話者の移行期」に現れるあいづちの上位 2 位のパターンにおいて、日台で共通しているのは「 $\beta \alpha$ 」というパターンである (日本語は第 1 位、台湾の「国語」と台湾語は第 2 位)。異なるのは、日本語の場合は「 $\alpha \alpha$ 」というパターンを 2 番目に多く使用する傾向があるのに対し、台湾の「国語」と台湾語では「 $\beta \beta$ 」というパターンを最も多く用いてターンをパスしていく傾向があることである。台湾の「国語」と台湾語の「 $\alpha \alpha$ 」のパターンは僅か 4 例 (全体の 3.4%)、日本語の「 $\beta \beta$ 」のパターンは僅か 2 例 (全体の 2.3%) にすぎない。その割合から考えると、日本人は「 $\alpha \alpha$ 」のパターン、つまり「 α 」のあいづちを台湾人より好み、台湾人は「 $\beta \beta$ 」のパターン、つまり「 β 」のあいづちを、ターンをパスするときに日本人より用いやすい傾向があると言えよう。

6. 考察

日台の「話者の移行期」のあいづちのパターンを見てきた。次に、各パターンにおける表現の形式について見てみよう。

〈日本語の「話者の移行期」のあいづちの形式〉

日本語において、平叙文の場合の上位2つは「 βa 」(42例・48.3%)と「 $a a$ 」(13例・14.9%)であり、疑問文において最も現れたパターンは「 βa 」(10例・11.5%)である。

日本語の平叙文「 βa 」のパターンは、「あ」プラス「そうですか↓」や「そうだね」「そーお↑」などの「 β 」の表現と、「はい」系(「はい」、「ええ」、「うん」など)の「 a 」の表現を基調とし、これらが42例中30例、全体の71.4%を占める。そのほか、「あっ本当↓」、「本当↓」などと「はい」系との組み合わせもよく見られ、これは42例中6例、全体の14.3%となっている。

平叙文の「 $D a a$ 」のパターンにおいては、「ええ」や「ええ ええ」と「ええ」の組み合わせの5例(38.5%)が一番多く現れており、次に「はい」と「はい」の組み合わせの3例(23.1%),「うん」と「うん」の組み合わせの2例(15.4%)が多く見られた。

疑問文「 $QD \beta a$ 」の場合においては、先行する「 β 」の形式は「本当に↑」と「ふーん」の1例ずつ以外の8例はすべて「そう」系や「あ」プラス「そう」系という形である。後続する「 a 」は「うん」4例(40.0%),「ええ」3例(30.0%),「はい」3例(30.0%)の順になっている。

〈台湾の「国語」と台湾語の「話者の移行期」のあいづちの形式〉

日本語に比べて、台湾の「国語」及び台湾語の「話者の移行期」におけるあいづち形式は、これら2つの言語の相互の影響で、コードスイッチングが起きており、日本語より複雑な状況になっている。平叙文の場合で多く観察できたパターンは「 $\beta \beta$ 」(43例・36.1%),「 βa 」(15例・12.6%)である。疑問文において頻繁に使用されているパターンは「 $\beta \beta$ 」(6例・5.0%)である。

「 $D \beta \beta$ 」,「 $D \beta a$ 」,「 $QD \beta a$ 」のいずれにおいても、第一構成要素の「 β 」の形式には台湾の「国語」と台湾語両方の言語表現が見られる。これに比べ、後続する第二構成要素の「 β 」もしくは「 a 」の形式の言語表現は限られている。

まず、「 $D \beta \beta$ 」の形式を見てみる。「 $D \beta \beta$ 」のパターンにおいては、第一構成要素の「 β 」の形式は台湾語の「hioh」系の8例(18.6%)と台湾の「国語」の「真的」系の6例(14.0%),「對」系の5例(11.6%)が頻繁に用いられていることが分かる。それに対して第二構成要素の「 β 」の形式は、台湾語の「heⁿ ah」系が24例で全体の55.8%,台湾の「国語」の「對」系が15例で全体の34.9%を占めており、これらが頻繁に見られた形式である。そして「 $D \beta \beta$ 」の組み合わせを見てみると、台湾語の「hioh」系と「heⁿ ah」系との組み合わせ(8例・18.6%)が最も多かった。

次に「 $D \beta a$ 」のパターンにおいては、第一構成要素の「 β 」の形式には台湾の「国語」と台

湾語の言語表現の両方が見られるのに対し、第二構成要素の「 a 」の形式については台湾語の「 he^n 」系¹²が13例（86.7%）と「中間的な表現」の「 hm 」系2例（13.3%）のみが観察された。そして「 $QD\ \beta\ \beta$ 」の場合においては、第一構成要素の「 β 」の形式は台湾語の「 $ho^.$ 」系の2例（33.3%）と「 $hioh$ 」系の2例（33.3%）が多く見られるのに対し、第二構成要素の「 β 」の形式は台湾語の「 $he^n\ ah$ 」系の3例（50.0%）と台湾の「国語」の「對」系、台湾語の「 $tióh$ 」系、「国台中複合」（表2の注(4)を参照）の「 he^n ，對啊」1例ずつ（16.7%）となっている。台湾の「国語」の「對」と台湾語「 $tióh$ 」とは同じ意味合いを持つので、意味的な面から考えれば、「 $QD\ \beta\ \beta$ 」の第二構成要素の「 β 」の形式は「 $he^n\ ah$ 」系¹³と「對」系・「 $tióh$ 」系との2種類が主と言える。

ここで、日台双方の「話者の移行期」に頻繁に現れるあいづちの形式をまとめてみると、日本語においては平叙文の場合も疑問文の場合も、〈「そう」系-「はい」系〉、もしくは〈「あ」・「ああ」+「そう」系-「はい」系〉という「 $\beta\ a$ 」のパターンを交わしながら、次の話者に交替していくことが分かった。また、日本語でよく見られる「 $a\ a$ 」の形式においては、「ええ-ええ」のように「ええ」で交わしていくパターンが一番多く見られた。

一方、台湾の「国語」や台湾語では日本語ほど〈「そう」系-「はい」系〉のような定型的なパターンは見られない。

台湾の「国語」と台湾語においては、共通語と方言の相互的な影響により、かなり複雑な状況になっている。「国語」の環境においても、台湾語のあいづちを用いるというコードスイッチングの現象が頻繁に見られたことは陳(2003)でも触れた。同様の現象は「話者の移行期」のあいづちにおいても見られた。表9、10、11は、移行期の平叙文と質問文の場合において、最も頻繁に現れたあいづちのパターンの言語コードと先行発話の言語コードについてまとめたものである。先行発話の中で台湾の「国語」と台湾語の2つの言語コードが混在して現れている場合には、先行発話が主としてどちらの言語コードによって行われるかを判定し、その言語コードに分類する。主要な言語コードが判断できない場合は先行発話のコードを「国・台」とする。

表9 「話者の移行期」における台湾の「国語」と台湾語のコードスイッチング：「 $D\ \beta\ \beta$ 」

パターン 先行発話	国β-国β	国β-台β	台β-国β	台β-台β	国β-中β	中β-国β
国　計26例	11　42.3%	6　23.1%	3　11.5%	3　11.5%	2　7.7%	1　3.8%
台　計13例	0　0%	0　0%	0　0%	13　100%	0　0%	0　0%
国・台　計4例	0　0%	1　25%	0　0%	3　75%	0　0%	0　0%

国：台湾の「国語」 台：台湾語

国 β ：台湾の「国語」の「 β 」のあいづち 台 β ：台湾語の「 β 」のあいづち

中 β ：「中間的な表現」の「 β 」のあいづち、ここでは「国台中複合」である

表10 「話者の移行期」における台湾の「国語」と台湾語のコードスイッチング：「D β α」

パターン 先行発話	国 β-国 α	国 β-台 α	台 β-国 α	台 β-台 α	中 β-台 α
国 計 6 例	0 0%	2 33.3%	0 0%	3 50.0%	1 16.7%
台 計 7 例	0 0%	0 0%	0 0%	7 100%	0 0%
国・台 計 2 例	0 0%	0 0%	0 0%	2 100%	0 0%

国：台湾の「国語」 台：台湾語

国 β：台湾の「国語」の「β」のあいづち 台 β：台湾語の「β」のあいづち

国 α：台湾の「国語」の「α」のあいづち 台 α：台湾語の「α」のあいづち

中 β：「中間的な表現」の「β」のあいづち、ここでは「国台中複合」である

表11 「話者の移行期」における台湾の「国語」と台湾語のコードスイッチング：「Q D β β」

パターン 先行発話	国 β-国 β	国 β-台 β	台 β-国 β	台 β-台 β	国 β-中 β	中 β-国 β
国 計 3 例	1 33.3%	0 0%	0 0%	1 33.3%	1 33.3%	0 0%
台 計 3 例	0 0%	0 0%	0 0%	3 100%	0 0%	0 0%

国：台湾の「国語」 台：台湾語

国 β：台湾の「国語」の「β」のあいづち 台 β：台湾語の「β」のあいづち

中 β：「中間的な表現」の「β」のあいづち、ここでは「国台中複合」である

上記の表から分かるように、「話者の移行期」においては、先行する発話が台湾の「国語」である場合、後続するあいづちが台湾語や「中間的な表現」に切り替えられることがよくある。一方、先行する発話が台湾語の場合は、後続するあいづちはすべて台湾語になっている。また、先行発話ですでに台湾の「国語」と台湾語のコードスイッチングが行われている場合においては、台湾語のあいづち表現を多用することも分かった。さらに、表10の「国 β-国 α」と「台 β-国 α」が0になっていることから、台湾語の「α」は台湾の「国語」の「α」より用いられやすいことが分かる。

これらの結果から、台湾語のあいづちが会話に用いられやすいこと、さらに、台湾の「国語」の発話環境においてあいづちを使用する際には、台湾語、特に台湾語の「α」に切り替えやすいということが言える。

〈日台の比較〉

前述した結果を受けて、日台の資料から最も頻繁に見られた上位二つのパターン（日：「β α」・「α α」；台：「β β」・「β α」）の典型的な形式を次のような図表で示すことができる。

表12 日台「話者の移行期」に現れた典型的なパターン

	$\beta \alpha$	$\alpha \alpha$
日	「あ」・「そう」系 — 「はい」系	「ええ」 — 「ええ」
	$\beta \beta$	$\beta \alpha$
台	「国」：「真的」系， 「對」系等 「台」：「hioh」系等	「国」：「這樣」系等 「台」：「án-ne」系等

「国」：台湾の「国語」 「台」：台湾語

日台の「話者の移行期」で現れたあいづちの回数は、表5から日台とも2回のパターンが最も多く、3回のパターンでは台湾の「国語」と台湾語は日本語よりも多い数値結果が得られた。3回のパターンというのは元の話し手にもう一度ターンが戻ってきたパターンであり、Iwasaki (1997)がいうフロア再構築型“floor reconstruction”のパターンである。話者交替という役割の面から考えれば、日台のあいづちはともに話者移行の交渉の役割を果たしているが、台湾人は日本人より複数のあいづちを用い、元の話者が自分の話を再構築するパターンが多いということになる。

また、2節でも述べたが、Iwasaki(1997)は日本語のあいづちの形式を非語彙的型“non-lexical backchannels”，フレーズ型“phrasal backchannels”，実質名詞型“substantive backchannels”（繰り返しなど）の3つに分け、隣接ペアの観点からそれぞれの性質による現れる箇所を論じた。非語彙的型のあいづちは肯定の答えのように使用され、隣接ペアの第二構成要素に特性を持ち、一方、フレーズ型や実質名詞型のあいづちの多くは質問の形式を保持しているため、反応を要求する隣接ペアの第一構成要素に似通っていると述べられている。仮に、Iwasakiの解釈に従うとすると、「 $\beta \alpha$ 」の形は説明がつくが、「 $\alpha \alpha$ 」が数多く存在している事実を説明しきれない。

筆者の考えとしては、話者移行期に現れた第一構成要素のあいづちは先行する発話に対して反応するあいづちであり、その次に発された第二構成要素のあいづちは先行するあいづちに対する反応（Yngve(1970)がいう“back-backchannels”である）であり、ターンをパスする役割を担っている。第一構成要素のあいづちとして日台ともに最も現れたのは「 β 」の形式である。話題が一段落したところで話者の交替が始まる時や、質問に対する答えの後は、話し手の話の意図もある程度把握できると考えられ、このように「 β 」のあいづちが用いられることは陳(2001, 2003)で述べた「 β 」のあいづちの特質と一致している。

しかし、日本語においては、「 β 」のほかに「 α 」も最初に現れる割合が高い。それは、日本語のコンテキストの環境では、言い差し表現が発達していることに関係していると考えられる。

例えば次の<例6>はCがRの自宅の庭にある牡丹を見せてもらおうとする依頼の場面である。Cは最初に牡丹が咲いているかどうかを確認し、咲いていることを確認できたところで、用件を切り出そうとした。が、言い方を思案しているためか、話を途中(7C)で打ちきり、8Rの「ええ」のあいづちに対して、気持ちを察して欲しいと9Cが「ええ」を打ち、ターンをパスした。Cの

意図を感知した10R ではそれを受け話題を展開させた。

〈例6〉

1C：あのう// 牡丹がね

2R： // えっ↑

3C：牡丹が咲いてますで// しょうかっていうことで

4R： // ええ 咲いてる

5C：そう// ですか↓

6R： // 咲いてる(0.8)ええ

7C：それ// で

8R： // ええ

9C：ええ

10R：ええ 今年はね

このように日本語の場合では、文の途中で話を言いきらずに打ち切り、相手に察してもらおうとする傾向があるため、話が言い終っているかどうかを判断できる基準があいまいである。そのため、聞き手が「 α 」のあいづちを打ってもっと多くの情報を要求するということが起きやすくなる。それに比べて台湾の「国語」と台湾語の場合は、構文上の制約が厳しいため、話を言いきる場合が多く、話し手と聞き手の間で言い終ったかどうかということに関しての「ミスコミュニケーション」が生じにくいと思われる。これにより日台の話者移行期で最初に現れたあいづちに違いが見られたと考えられる。

次に第一構成要素のあいづちに対して発せられた第二構成要素のあいづちに関する日台の相違を見てみよう。第二構成要素のあいづち表現において日本語は「 α 」が最も多く、台湾の「国語」と台湾語は「 α 」より「 β 」を用いやすい傾向が見られた。これは文化や言語のスタイルによるものであると考えられる。「 α 」のあいづちは「聞いている」とどまり、話者自身の態度などは加えられていない。それに比べ、「 β 」のあいづちは話者自身の態度が加わっている。つまり、「 β 」は「 α 」に比べて自分の気持ちを前面に出すことができる積極性を持つ表現である。ものを言わずとも自ずと己の気持ちを察して欲しいとする日本の文化や会話のスタイルからすると、次の話者を決める際に比較的控えめの「 α 」のあいづちを用いることはそのスタイルに合っている。一方、台湾人が積極性を持つ「 β 」のあいづちを多用していることは、自分も同様の気持ちを持ち同じ立場にいたいということを積極的に表現することを通して、現在共有している会話に積極的に参加する態度を示し、会話場面の維持や成立を図っていると考えられる。筆者が母語で親戚と会話しているとき、うっかり「 α 」を打ちすぎ、相手にあまり積極的ではないとか自分の話に無関心という印象を与えてしまった経験からも上記のことはうかがえる。

最後に、出現頻度に関して Iwasaki(1997)の報告と比較してみる。前述した通り、Iwasaki はタイ語と英語のデータに比べて、日本語の“loop sequence”が極めて高いと述べている。これは、日本人の相互依存“mutual dependency”という会話のパターンに関連しており、日本文化

の特徴である「思いやり」、「甘え」、「遠慮」と「和」などに由来していると論じられている。

しかし、本研究が扱った日台の資料の比較においては、「話者の移行期」における複数のあいづちは、日本語では141分のデータに対し87回、台湾の資料では167分に対し119回現れた。単純計算になるが、これを時間の割合で考えてみると、日本語の会話では約1.6分に1回、台湾の会話では約1.4分に1回ということになり、台湾の会話の方が日本語の会話よりもあいづちがやや高い頻度で現れていることになる。Iwasaki の解釈に従えば、台湾人も「思いやり」、「甘え」、「遠慮」、「和」などの配慮をした上で、“mutual dependency” という会話のパターンを生み出していることになる。文化的な要因¹⁴で日本語と同じ現象がもたらされていると結論付けるのは尚早であるが、一つ言えるのは「話者の移行期」にあいづちが頻繁に現れるのは日本語だけの特徴ではなく、台湾人も日本人と同じく頻繁に複数のあいづちを用い、話の相手との交渉をしながら、次の話者を決めていくということである。

このように日台における「話者の移行期」のパターン及びその形式を指標値として参考にできれば、異なった母語話者同士がコミュニケーションを行う際に生ずるであろうお互いの違和感や戸惑いが軽減でき、よりスムーズな話者交替の交渉が行われることが期待できよう。

7. まとめ

本研究は「話者の移行期」に現れた複数のあいづち、特に日台ともに最も多く現れた2回のあいづちのパターンを中心に分析した。その2回のパターンのあいづちにおいて、第一構成要素のあいづちは先行する発話に対するあいづちであり、後続する第二構成要素のあいづちはターンを放棄するサインであると考えられる。話し手の話している間に現れるあいづちが話し手をサポートする役割を果たすことは従来言われているが、あいづちの基本義以外に複数の役割が同時に重なっており、発話箇所によってその複数の役割が消長していると考えられる。「話者の移行期」の段階で複数現れるあいづちにおいては、第一構成要素は依然として話し手をサポートする役割を、第二構成要素はターンをパスする役割を主として担い、相手と次の話者を決めていく上での戦略یとして用いられることが分かった。また、「話者の移行期」のあいづちが日台ともに頻繁に使用されていることも観察された。

話者移行期の先行発話が平叙文の場合においても疑問文の答えの場合においても、使用されているあいづちのパターンは同じような傾向を示している。

形式に関しては日台で相違点が見られた。日本語では「 βa 」や「 $a a$ 」のパターンのあいづちが現れやすい。台湾の「国語」及び台湾語でも日本語と同じ「 βa 」のパターンが現れるが、日本語より「 β 」を好み「 $\beta \beta$ 」を多用していることが分かった。そして、このように用いられたあいづちのパターンは次のようにまとめることができる。

① 日台の「話者の移行期」に現れたあいづちのパターン

日本語で頻繁に観察されたパターンは「 βa 」、「 $a a$ 」の順になっており、台湾の資料では「 $\beta \beta$ 」、「 βa 」となっている。日台で共通しているのは「 βa 」というパターンである。異なるのは、日本語の場合では「 $a a$ 」というパターンを2番目に多く使用する傾向があるのに対

し、台湾の「国語」と台湾語では「 $\beta\beta$ 」というパターンを最も多く用いて次の話者を決めていく傾向があることである。「話者の移行期」では、日本人は「 a 」のあいづちを、台湾人は「 β 」のあいづちを好む傾向がうかがえた。

② 日台の「話者の移行期」に現れたあいづちの形式

日本語の場合には、平叙文でも質問文でも「 βa 」のパターンは「あ」・「ああ」＋「そう」系－「はい」系という典型的な組み合わせとなっており、「 $a a$ 」のパターンには「ええ」－「ええ」という組み合わせが多用されていることが観察された。

一方、台湾の資料においては、言語のコードが複雑であるため日本語ほど定型的にはなっていない。傾向としては、平叙文や質問文の「 $\beta\beta$ 」や「 βa 」においても、先行する「 β 」が台湾の「国語」の「 β 」であったり台湾語であったりと、そのバリエーションも多い。しかし、それに後続する「 β 」や「 a 」の形式は、台湾の「国語」の文脈においても台湾語の文脈においても台湾語の「heⁿ ah」系と「heⁿ」系が多用されていることが観察できた。

注

- 1 “non-lexical backchannels” は「んー」、「ええ」、「はい」などの表現, “phrasal backchannels” とは「本当?」「なるほど」「そうですか」などの表現を指している。“substantive backchannels” とは繰り返しや先行する発話に対する質問などである。
- 2 3回のあいづち表現が連続して現れる場合、一番最初に現れるあいづち表現を“loop-head”, その次に現れるあいづち表現を“loop-tail”とし、それと同時にこの“loop-tail”は次の3番目のあいづち表現にとっての“loop-head”となり、その3番目のあいづち表現は2番目のあいづち表現の“loop-tail”となる。
- 3 Iwasaki(1997)はHayashi(1996: p.32)で述べられているフロア概念—会話参加者を社会的・心理的に繋げたダイナミックな認知の実態であり、参加者達が共有する空間的なものである—を「概念的フロア」“conceptual floor”とし、また、コミュニケーション・プロセスにおける意味的・機能的な概念で、コミュニケーションの単位を「単位的フロア」“unit-floor”と名づけた。すなわち、「概念的フロア」とは参加者全員が共有する文化的概念であり、「単位的フロア」とは会話の単位で例えば話題といった結束性のあるスピーチである。Iwasakiはこの2つのフロア概念から“loop sequence”を検討した。
- 4 台湾の「国語」は北京語をベースとした共通語であり、台湾では「国語」と呼ばれているが、ここでは日本の「国語」と区別するために、台湾の「国語」と記す。台湾語は福建省の南の方言である閩南語を源としている。また、台湾語の表記については昔から様々な議論が交わされている。本研究では、台湾の「国語」の場合には漢字のみ、台湾語の場合には表記しやすい、百年以上前にキリスト教の宣教師達によって考案された教会ローマ字で表し、台湾のあいづちの使用について考察を行う。声調に関しては、樋口(1992: p.30)の7種類の分け方を参考とする。
- 5 「いいよども」やためらいなどはあいづちのように先行する発話に対する反応とは異なり、発話者が自分の言おうとしていることに適切なことばを探すための時間稼ぎのような表現と考え、本研究では対象外とした。
- 6 陳(2001)は〈「はい」系〉〈「そう」系〉〈その他系1〉〈その他系2〉〈その他系3〉の分類だっ

- たが、より分かりやすくするために、ここでは、〈その他系1〉を〈感情表現系〉、〈その他系2〉を〈複合系〉、〈その他系3〉を〈先取り系〉に変更した。
- 7 アクセントによる相異が見られないため、ここでは便宜上、同じ形式のものは、アクセント記号抜き形式のみで、系列を作った。実際の発音を指しているときにアクセントつきのもので表す。
 - 8 台湾の「国語」と台湾語との長年にわたる相互間の影響の結果、典型的な「国語」や台湾語の表現から派生した表現及び台湾語と「国語」の形式が混在している表現を「中間的な表現」とする。
 - 9 疑問文はターンを譲渡したものだけではなく、強制的に相手の反応結果を求めるものでもある。従って、相手の答えを求めた後に、理解するための情報を入手したために「β」というあいづちをより多く使用するのではないかと予想した。一方、平叙文の場合、現在の話し手から聞き手に強制的にターンを譲るのではなく、ターンを取るか取らないかという随意的な選択肢を与える状況となり、そこで、さらに相手の話を聞きたい（つまり話を理解するのに情報が足りない）という「α」を打つ場合が疑問文より高いのではないかと予想した。しかし、結果的に、両者に違いは見られなかった。
 - 10 日台のあいづちの使用に相違があるため、直訳の場合は不自然に感じられることがある。例えば、5Cの「そうよ↓」は日本語であれば「ええ」などの方が自然であると思われる。
 - 11 日台のあいづちの使用に相違が見られたため、直訳の場合に違和感を覚える可能性がある。例えば、2Cの「なるほど」は日本語なら「そうか↓」（「いい考えですね」）など、5Rの「そうよ」は日本語であれば「ええ」などの方が自然に感じられるであろう。
 - 12 この「heⁿ」系では「hèⁿ」は12例で、「héⁿ」は1例計13例である。
 - 13 「D β β」と「QD β β」の第二構成要素の「β」に現われる「heⁿ ah」系はすべて「hèⁿ ah」という形式である。
 - 14 台湾人は日本人より積極的で、個人主義的傾向が強いという一般的な印象がある。

参考文献

- 今石幸子(1993)「聞き手の行動～あいづちの規定条件～」『阪大日本語研究』5, 95-109, 大阪大学
- 大浜るい子(2000)「日本語のターン交替とあいづち—母語話者と学習者の比較をとおして—」『広島大学教育部紀要 第二部』49, 153-161, 広島大学
- 金志宣(2000)「turn 及び turn-taking のカテゴリー化の試み—韓・日の対照会話分析」『日本語教育』105, 81-90, 日本語教育学会
- 金志宣(2001)「turn-taking パターン及びその連鎖パターン—韓・日の対照会話分析」『人間文化論叢』4, 153-166, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- 金志宣(2002)『韓・日の会話における turn-taking と連鎖—大学生の討論を資料として—』（未公開）お茶の水女子大学博士論文
- 陳姿菁(2001)「日本語の談話におけるあいづちの種類とその仕組み」『日本語教育』108, 24-33, 日本語教育学会
- 陳姿菁(2003)『会話のプロセスにおけるあいづちの構造—日台の電話会話の場合—』お茶の水女子大学博士論文（未公開）
- 陳姿菁(2005)「日台の電話会話における新たなターンの開始—あいづち使用の有無という観点から—」『世界の日本語教育』15（掲載予定）

樋口靖(1992)『台湾語会話』東方書店

堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64, 13-26, 日本語教育学会

堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版

メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版

Hayashi, R. (1996) Cognition, empathy, and interaction: Floor management of English and Japanese conversation, *Advances in Discourse Processes* 54, Ablex Publishing Corporation.

Iwasaki, S. (1997) The Northridge earthquake conversations: The floor structure and the 'loop' sequence in Japanese conversation, *Journal of Pragmatics* 28, 661-693.

Yngve, V. H. (1970) On getting a word in edgewise, *Papers from the sixth regional meeting Chicago Linguistic Society*. 567-578, Chicago, Illinois: Chicago Linguistic Society.

付 記

本稿は筆者が2003年度お茶の水女子大学大学院に提出した博士学位論文の一部を加筆，修正したものである。投稿した際に査読者から貴重な意見を多数頂戴したことに感謝の意を表したい。

(投稿受理日：2004年1月25日)

(最終原稿受理日：2005年7月12日)

陳 姿 菁 (ちん しせい)

tzuching.c@gmail.com

Study of the backchannels that appear at the time of speaker change in Japanese, Mandarin and Taiwanese

CHEN Tzuching

Keywords

backchannels, Japanese, Mandarin, Taiwanese, speaker change

Abstract

In this study, the consecutive backchannels made when a speaker shifts to the next speaker (the speaker change term) were clarified. As an analytical method “ α ” (*hai* group; *n* (嗯) group, *he* group, *hə* group, *hm* group, etc.) and “ β ” (*soo* group; *due* (對) group, *hih* group, *ho* group, etc.) classified in Chen (2001, 2003) were examined in order to determine how each would have appeared at “the speaker change term” in Japanese, Mandarin and Taiwanese. The results show that Japanese, Mandarin and Taiwanese speakers use consecutive backchannels as a strategy when a participant is deciding who the next speaker is. Among the results, there are 2 times pattern which a consecutive backchannels produced by two people were seen most abundant in Japanese, Mandarin, and Taiwanese. As for Japanese the most often used are “ $\beta \alpha$ ” and “ $\alpha \alpha$ ”, and as for Mandarin and Taiwanese they are “ $\beta \beta$ ” and “ $\beta \alpha$ ”. When analyzed focusing on the 2 times pattern, backchannels appear first as a response to the preceded utterance and then followed by a pass turn. In passing turn the backchannels “ α ” is observed in Japanese, while “ β ” is used extensively in Mandarin and Taiwanese.